



切絵「繁栄の祈り」 比企義彦 作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所
茨木市元町4-3

072 (622) 2346

http://www.
ibarakijinja.or.jp/

茨木のえべっさん

当社の古文書に、宝永五年（一七〇八年）にかかれた「恵美須神社縁起」があります。それによると元和三年（一六一七年）里の商人が田舎からお米を買い求めてきたところ、その俵の中から恵美須神の御絵像が現れた。商売繁盛のめでたいしるしであるとして、氏子中の商家が交替で永年お祀りしてきた。しかし、私宅での御神像を持ち廻る事は恐れ多いと、宝永五年十一月二十日より茨木神社でお祀りすることになり、以後毎年十一月二十日には祭礼を厳修して、村里の商いが益々繁盛することを祈ってきた。と書かれています。その後、明治十二年に新たな社殿を現在の場所に造営し、茨木神社の一境内社となりました。

現在の十日戎がいつの頃より斎行されてきたのか定かではありませんが、かなり以前から行われていたようで吉兆や笹も授与されていましたが、おおかたの人は西宮や今宮の戎さまに参拝されるというような状態でした。それでは古い歴史のある茨木恵美須神社の大神さまに対して申し訳なく、また十日戎の発展は町の発展に繋がるとの思いから市内の商人有志が集まり幾度となく会議を重ね、また、市をはじめ関係団体へ働きかけると共に多くの商業人の協力・賛同を得て昭和二十八年に茨木恵美須講が結成されました。発足当初、社殿の装飾や福笹の準備で徹夜されたり、市民への周知のためアドバルーンや花火を上げられる等々ご苦労されたと伝え聞いております。

そのため当初は苦しい運営が続いたようですが、少しでもと浄財を積み立て、昭和三十八年に十周年事業として現在の社殿の御造営を始め、春日燈籠建立、防犯灯の設置、植樹等々恵美須神社のみならず当社社護持のために多大にご尽力いただいております。

それぞれの時代にあって講元様をはじめ多くの講員の方々のご苦労・ご努力・ご奉仕により、商売繁盛・福徳円満の御神徳にふさわしい十日戎の神賑行事が受け継がれ年々盛大に執り行われて今日に至っております。

奉賛会だより

四月十八日当神社の春祭りの日に併せて、恒例の奉賛会厄除安全祈願祭が斎行され多数の奉賛会員にご参列いただきました。

午後二時より、本殿におきまして、国の繁栄と農産業の振興また奉賛会員の厄除と家内安全を祈願する祝詞を奏上。神楽奉納。そして宮司玉串奉奠の後、奉賛会を代表して榎浪会長が玉串を奉奠されました。

次に、会場を参集殿に移し、総会が行われました。

総会終了後、宮司より「神社



参拝あれこれ」と題して講話がありました。

「縄と鳥居」「鈴」「賽銭」「玉串」「神楽」「拍手」「おみくじ」など神社に参拝するときの心構えや、それぞれの由来などについてわかりやすくお話いただきました。

例えば「おみくじ」では、大吉だから喜び、凶がでたら落ち込むのではなく、神さまからのお諭しですから内容をよく読んで、「はいわかりました。ありがとうございます」と受け入れることが大事です。と言うお話に参加した奉賛会の方々も深くうなずいておられました。

会員の皆様には、六月三十日の大祓・茅の輪神事の案内並びにその際の形代及び神楽奉納券の配付をはじめ一年の諸祭儀や諸行事のご案内。また毎月の月次祭の折にはその月にお生まれになられた会員の誕生祭並びに会員の家内安全・厄除開運を神前でご祈願申し上げております。

また、毎年御神札の授与、暦などを年末に配付贈呈しております。

年会費は、三千円です。

ご入会は随時行っております。社務所まで御申し越し下さい。

下中条氏子参列

多賀神社例祭齋行

四月二十
二日末社多
賀神社の例
祭に下中条
町の多数の
氏子の皆様
にご参列い
ただきまし
た。



末社多賀
神社は、旧下中条村の氏神でしたが、明治四十一年（一九〇八年）、一町村に一神社とする神社合祀令により茨木神社へ合祀されました。

昨年の合祀百年を記念した覆屋と多賀神社ご本殿の造営を契機に、かつての下中条村地域の有志の皆様で下中条社保存会が結成されこの度の参列となりました。

外に同じく合祀令によつて合祀された神社として旧上中条村氏神皇大神社があります。昭和五十九年旧村人によつてご造替がなされた折、神社会が結成され、以後例祭には多数の方々にご参列していただいております。

大松の伐採

手水舎の手前にある太い松の木が枯れたため去る五月中旬、修祓の後伐採しました。昨年来木の上部の松葉が茶色くなり、今年に樹木医さんに診ていただいたところ、松食い虫の被害とのこと、このまま放置しておく、他の松まで被害が拡大する恐れがあるため、残念ながら伐採することになりました。

当神社夏祭を

大阪ミュージアム登録

今年一月二十七日に大阪府知事より「まちの顔」として内外に発信する「大阪ミュージアム構想」の個性・活気・愛着・調和ある「祭り」として当神社夏祭が認定された旨の登録証をいただきました。



神さまのおはなし ⑱

天孫降臨

あまらすおみかみ
天照大御神さま高木神さまは、
太子である正勝吾勝々速日天忍
穂耳命さまに「今や、葦原中国
を平定し終わったと申ししていま
す。お降りになって統治しなさい
い」と仰せられました。

これに対して、正勝吾勝々速
日天忍穂耳命さまは「私が降ろ
うとしている間に、子供が生ま
れました。名前は天邇岐志国邇
岐志天津日高日子番能邇々芸命
と申します。この子を降しまし
よう」と申されました。邇々芸
命さまは高木神さまの娘の万幡
豊秋津師比売命様とご結婚され
生まれた子供です。

正勝吾勝々速日天忍穂耳命さ
まが邇々芸命さまに「この葦葦
原水徳国は、あなたが治める国
であると委任なさいました。仰
せのまにまに天降りなさい」と
仰せられました。

邇々芸命さまは天降ろうとす
る時に、分かれ道にいて、上は
高天原を照らし、下は葦原中国
を照らす神さまがいました。天

照大御神さまと高木神さまは、
天宇受売神さまに「あなたは、
しとやかな女ではありませんが、
敵対する神に面と向かつてなら
み勝つ神です。だからあなたが
行つて、吾が御子が天降ろうと
する道に、誰がこのようにして
いるのか問うてきなさい」と仰
いました。それで天宇受売神さ
まが行つて問われたところ「私
は、国つ神、名は猿田毘古神で
す。出てまいりましたのは、天
つ神の御子が天降りなさると聞
きましたので、先頭に立つてお
仕え申し上げようと参上して待

っております」と申されました。
そこで、天児屋命・布刀玉命
・天宇受売命・伊弉許理度売命
・玉祖命の併せて五つの部族の
長の神さまとともに天降られま
した。天照大御神さまを天の岩
屋から招きだした八尺の勾玉と
鏡と草那芸剣とまた、思金神・
手力男神・天石門別神をお添え
になり、「この鏡は、私の御魂
として、私に仕えるようにお祀
りしなさい」さらに続けて「思
金神は、今言つたとおり受け持
つて祭事を執り行いなさい」と
仰いました。そこで邇々芸命さ

まと思金神さまは五十鈴の宮を
崇め祀られました。
このようにして、天照大御神
さま高木神さまに命じられた邇
々芸命は、高天原を後に雲を押
し分け、筑紫の日向の高千穂に
天降られました。邇々芸命さま
は「ここは韓国に相對し、笠沙
の岬を通つて朝日が直に射す国、
夕日の照らす国である。とても
よい地だ」と仰せられ、盤石の
石の上に宮柱を太く立て千木を
高く掲げた宮殿をお建てになり
お住まいになりました。

伊勢の神宮 式年遷宮だより

平成二十一年十一月三日

宇治橋渡始式が斎行されます

式年遷宮では、社殿のみなら
ず内宮の入口、五十鈴川にかか
る宇治橋もまた架け替えられま
す。

宇治橋は全長百二メートル幅
八、四メートル。鎌倉時代から
あったようですが、現在と同じ
大きさになったのは室町時代の
末期と伝えられています。
中世までは老朽化すればその
都度架け替えられていましたが、

近世から遷宮に併せて行われてきま
した。

昭和二十四年（一九四九年）に斎
行予定だった遷宮が、大東亜戦争の
敗戦により昭和二十八年（一九五三
年）に延期されましたが、宇治橋は、
地元からの熱望によって予定どおり
昭和二十四年に架け替えが行われま
した。以来、宇治橋の架け替えは遷
宮の四年前が恒例となりました。
新しい橋の完成後の今年十一月三

日、木の香漂う橋を全国から選
ばれた一家三代の夫婦が晴れや
かに渡る宇治橋渡始式が行われ
ます。
式年遷宮に先がける宇治橋の
架け替え。新しい橋は私達に遷
宮がまた一歩近づいたことを感
じさせます。



前回(平成元年)の渡始式

